事　業　実　施　報　告　書

団体名：DET 埼玉

事業名　障害平等研修（ＤＥＴ（デーィーティー））を開催する事業

【障害平等研修（Disability Equality Training:DET）とは】
障害者差別解消法を推進するための研修で、障害者がファシリテーター（対話の進行役）となり対話による発見を通し、多様性に基づいた共生社会を作る行動を促す生涯教育。
（障害平等研修フォーラムＨＰより引用）
DET は東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会のキャスト（ボランティア）共通研修で活用された。

１　事業の目的

障害者差別解消法が施行され、埼玉県には「埼玉県障害のある人もない人も全ての人が安心して暮らしていける共生社会づくり条例」が施行されているが、まだまだ世間一般的には知られてなく、だれもが安心して暮らせる街には、まだ遠いと思われる。

障害者自身がファシリテーターの障害平等研修（ＤＥＴ）を行うことで、参加者自身が「障害の社会モデル」の視点を獲得、そして参加者自身が社会的障壁を無くすための具体的な行動の獲得を行い、多様性に基づいた共生社会を作る。

２　事業内容

（１）事業の概要

①　DET の開催

障害者福祉関係に係る関係各所にアプローチを行い DET 開催を行う。

（２）事業の流れ

昨年度 DET に参加していただいた方々に、DET 開催についてのアプローチを行い開催することが出来た。

シラコバト基金を活用した事業（５回実施）

回数	日付	主催者	開催場所	参加人数
1	7 月 14 日	DET 埼玉	所沢市こどもと福祉の未来館	23 名
2	9 月 18 日	入間市障害者基幹相談支援センター	入間市中央公民館	21 名
3	11 月 29 日	戸田市身体障害者福祉会、上戸田地域交流センターあいパル、このゆびと～まれ、DET 埼玉	戸田市あいパル	48 名
4	12 月 8 日	和光市社会福祉協議会、TOMOTOMO くらぶ、DET 埼玉	和光市総合福祉会館	48 名
5	1 月 26 日	DET 埼玉	所沢市こどもと福祉の未来館	8 名
			参加者合計	148 名

DET 参加者は、市議会議員、行政職員、福祉従事者、障害者（肢体、精神、聴覚、視覚）、民生委員、障害者の保護者、障害者支援団体、一般市民他

12 月 8 日の DET の様子

1 月 26 日の DET の様子

（３）連携・協力機関

①入間市障害者基幹相談支援センター　②戸田市身体障害者福祉会
③入間市社会福祉協議会　④上戸田地域交流センターあいパル
③和光市社会福祉協議会　⑥このゆびと～まれ
⑤ＴＯＭＯＴＯＭＯくらぶ　⑧DET 群馬

【１０月２９日シラコバト助成事業 DET　戸田市あいパルで開催された DET が令和１年１２月２２日付け毎日新聞に掲載】

2019
12/22
毎日新聞

当事者と学ぶDET

障害平等研修

障害――社会が生み出したもの

ともに
2020
バリアーゼロ社会へ

五輪ボランティア必修

東京五輪・パラリンピックで競技会場などの案内をする大会ボランティアの研修が11都道府県を会場に始まっている。大会組織委によると、今回は五輪・パラリンピックで初めて取り入れられ、ボランティア全員が受けるプログラムがある。それが障害平等研修（DET）だ。障害者が進行役となり、「障害とは何か」「解消のために何ができるか」を考える。【斎藤文太郎、写真も】

ボランティア研修は10月にスタートし来年2月まで続く。約8万人がそれぞれ3時間の講習を受け、大会の歴史や概要を学ぶ。DETはどんな内容なのか。11月29日に埼玉県戸田市で開かれた研修を取材した。

この日の進行役は車いす利用者や視覚障害者ら6人。冒頭、約50人の参加者に、それぞれが考える「障害」の定義を手元の用紙に書き出すよう求めた。「生きづらさを感じる人の総称」「不自由」…。障害者に着目した言葉が目立った。

今度は、買い物をしようとしている車いすの女性のイラストが配られた。「障害はどこにあると思いますか？」。車いすを使う埼玉県入間市の上野優一さん(51)が、該当すると思う箇所に付箋を貼るよう指示すると、参加者は周囲と意見を交わしながら付箋を貼っていく。車いすの前の段差、手の届かない棚に陳列された商品、サポート役が不在の空間。貼られた箇所はほとんどが女性の「周りの環境」だった。

続いて、障害者と健常者の立場が逆転した「架空の世界」のビデオが上映された。健常者の主人公はタクシーやバスに乗車できず、カフェでも入店を拒まれる。公園では奇異の目を向けられ、訪問先で点字資料を渡されるが読めない――。

「障害とは何だと思いますか」。上野さんの問いかけに、参加者は改めて手元の用紙にペンを走らせた。「健常者がつくり出した」「現在『障害がない』と言われている人の中にある」。多くの答えが、冒頭に書いた内容とがらりと変わっていた。研修後、上野さんは「障害は社会が生み出している、という考え方が伝わったのでは」と手応えを感じた様子だった。東京大会組織委の担当者は「世界中から多様な人を受け入れるのに重要なプログラムだ」と話している。

障害平等研修（DET）　1990年代に英国で開発された。日本では2014年度から導入され、近年急速に広がっている。進行役の障害者の育成に当たるNPO法人「障害平等研修フォーラム」（東京都大田区）によると、導入当初の開催は年10回程度で大学や市民講座などが中心だった。その後、進行役の育成が進むとともに企業や行政機関からの依頼が増え、18年度は200回以上にまで増えた。17年度以降、東京五輪組織委の中でも実施されている。

障害とは何かについて意見を交わす参加者ら＝埼玉県戸田市で

「見えないふりに危惧」

畝本彩美さん
＝本人提供

先天性の視覚障害がある横浜市の会社員、畝本彩美さん(30)は東京五輪・パラリンピックのボランティア向けのDETで進行役を務める。東京大会は楽しみだが、障害者への理解が本当に進むのか不安も感じている。

今年10月、視覚障害者の知人が東京都のJR新宿駅でホームから転落し電車にはねられ亡くなった。ブラインドサッカー元日本代表選手の石井宏幸さん（当時47歳）。畝本さんも学生時代からさいたま市のブラインドサッカーチームに所属している。

事故時、周囲には多くの通勤客がいたとされる。「誰かが『大丈夫ですか』と声をかけていれば防げたのではないか」。そんな思いが脳裏から離れない。「障害者は周囲の健常者から見えないふりをされがちだ。DETは互いがしっかり向き合うきっかけになる」と期待する。事故後、DETでは必ずこう呼びかけるようにしている。「周囲に困っていそうな人がいたら、声をかけるか、せめて見守ってほしい」

【所沢市立美原中学校で開催されたDETが１令和２年１月２２日付け毎日新聞に掲載】

「障害とは？」広がる学び

2020.01.22
読売新聞

「壁は社会に」考え主流

東京五輪・パラリンピックの開催を今夏に控え、障害について考える学校の授業や企業の研修が増えている。特に障壁（バリア）の原因は障害者の側にあるのではなく、社会にあるという「障害の社会モデル▣」の考え方を取り入れた授業も多く、大会ボランティアの研修にも盛り込まれている。

▣障害の社会モデル　障害は個人の心身の機能的な制限ではなく、環境や人の態度など社会の様々な障壁によって作り出されるものという考え方。2006年に採択された国連の障害者権利条約に取り入れられ、日本政府が17年に作成した共生社会の実現に向けた行動計画でも、こうした考え方が盛り込まれている。

共生社会のあり方について生徒に語りかける畝本さん（右）ら（昨年9月、埼玉県所沢市の市立美原中学校で）

中学で 企業研修で

Tokyo 2020

「障害って何だと思う？」。昨年9月下旬、生まれつき視覚障害のある畝本（あぜもと）彩美さん(30)が埼玉県所沢市の中学校の体育館で、中学2年生約220人にこう語りかけた。生徒からは「体が不自由なこと」「不便なこと」などの意見が出た。

そこで畝本さんが、車いすに乗って買い物に向かう女性のイラストを示し、「どこに障害があるかな？　ペンで囲んでみよう」と促した。生徒たちは、階段や狭い店内など女性を取り巻く障壁の存在に気づき、丸で囲んでいく。続いて、障害者が多数を占める世界に健常者が迷い込むストーリーの映像が流された。障害がないことを理由に飲食店の入店やバスの乗車を拒否される内容で、差別される側から見える風景を示した。

最後にもう一度、「障害とは？」と問いかけると、生徒たちの回答は「思いやりで解決できること」「社会の環境が作り出すもの」と変わっていった。

この特別授業を主催したのは、NPO法人「障害平等研修フォーラム」（東京）の協力団体。その特徴は、「障害の社会モデル」の考え方を取り入れ、障害者自身が講師を務める点だ。障害者が困難に直面するのは心身の障害が原因とする「個人モデル」に対し、「社会モデル」では、社会が障壁を作っており、取り除く責務は社会にあると考える。

フォーラムが携わる研修は2014年度は10件ほどだったが、18年度は約140件に増加した。企業での研修が増えているほか、東京大会で活動する約8万人のボランティアの研修にも採用されている。

慶応義塾大の中野泰志教授（障害心理学）は「『障害の社会モデル』の考え方が浸透することは、障害者だけでなく、外国人や高齢者などを含め、誰もが住みやすい社会への一歩となる」と指摘している。

DET埼玉が所沢市社会福祉協議会から依頼を受け、所沢市立美原中学校に障害平等研修（DET）を実施

３　成果及び今後の展開

（１）成果

① 入間市社会福祉協議会が行う、第 2 次入間市地域福祉活動計画に「心のバリアフリー研修」事業として DET が活用された。

② 来年度、入間市役所職員研修としての活用について、市役所研修担当者と調整中。

③ DET に参加された県内市議会議員が同市議会一般質問で同市の研修として DET の活用推進について質問を行い、総務部長より検討するとの返答をいただいている。

④ 昨年度も本助成金を用いて DET を行った。
その参加者の中から、その方が属する団体から開催の依頼を受け DET を開催することが出来た。

⑤ 参加者からの実施後のアンケート（回答率８０％）で DET の研修について、９．２５（１０点満点）高評価の点数及びコメントをいただいた。（下記の参加者の声を参照）

⑥ DET の演習の中で、参加者の考え方が「障害の個人モデル」から「障害の社会モデル」への変化が多くみられた。

⑦ 昨年度も記載したが、障害者自身がファシリテーターとして進める DET は、「今まで沢山の研修を受けてきたが、障害者自身が行う研修は初めて受講した、そして障害者と話した事が無かったが、直接会話が出来きて、沢山の気づきを貰った」との多くの意見も聞かれた。

- シラコバト基金活用以外の実施（8 回実施）
  - ① 入間市民生委員・児童委員
  - ② TOMOTOMO くらぶ
  - ③ 早稲田大学
  - ④ 武蔵野大学
  - ⑤ 入間市社会福祉協議会
  - ⑥ さんさん会
  - ⑦ 川口市に肢体不自由の学校を作る会･きょうだい児の会ブレイブキッズ
  - ⑧ 入間わかくさ高等特別支援学校教諭
- 入間市・所沢市小中学校での DET（福祉授業）　８校
- DET 埼玉の協力で実施の DET
  群馬県知事参加の群馬県庁幹部の開催 DET をはじめ、東京都内他 9 か所に携わった。

（２）今後の展開

① 東京都では、東京都主催や自治体職員の研修で DET が活用され、群馬県では県知事参加で県庁職員幹部の研修も行われ、茨城県内でも県庁障害者福祉課主催で茨城県内市町村の障害者担当者研修でも活用されている。埼玉県内でも、も

っともっと認知される必要がある。（令和２年３月号のぐんま広報　山本太一の知事コラムでDETの事が書かれています https://www.pref.gunma.jp/07/b21g_00611.html）

② 障害者差別解消法（第五条）では研修の実施が明記又、「埼玉県障害のある人もない人も全ての人が安心して暮らしていける共生社会づくり条例」　基本理念　四「何人にも、社会的障壁に係る問題が認識され、障害及び障害者に関する理解が深まること」と記載されているがまさにDET実施後のアンケートに書かれた感想そのものであり、そのようにこの研修の強みを、もっとアピールポイントとしてDETを展開する。

③ 埼玉県内でファシリテーター養成講座に参加し、共生社会に向けた取り組みを行う同志を作る。

④ アンケートの参加者の意見では、友人、知人、職場の人々に受けてほしいとの意見も多くあるが、その様な意見を言っている方々を通して DET の認知度が他の人々に広まっていくようにする必要がある。

（一部抜粋参加者の声）

- 障害者差別について良くわかった
- この研修を今後２～３度継続して欲しい
- もう一度研修の機会を
- 素晴らしい研修でした
- もっと一般に広がると良いと思う。
- 今後もDETを広めていきたいです。
- とても良かった、２・３回と継続して欲しい
- 数多くの方に体験していただきたい
- 機会をもっと作って欲しい。
- ぜひ、皆さまにも勧めていきたい
- たくさんの人に受けて頂きたい研修だと思いました。知る事は大切ですね。
- とても大事な事です。今回の研修は障害を持っている方や職種が多岐にわたっているため、深く考える教材となるものがたくさんありました。研修を行う際、色々な方がいらっしゃる事が必要であると感じました。自分が出来ることをひとつずつやっていきたいと思います。
- 3回の研修ですが、毎回自分でも違う考えが出てきます。正しい答えはないのだと思いました。
- 身近な問題として考える事が出来、有意義な会でした。
- この研修を受けてまだまだ障害についての理解や配慮が足りないと反省しました。
- 改めて障害とはなにか考える事ができました。やはり、まわりの意識であったり、周りが勝手に作っていると感じました。幼い時期から教育の中でまわりに伝えていく事が大切ですね（頑張ります）
- 今まで受けてきた研修と違い、楽しくみなさんと考えられた研修だったと感じました。
- 少しづつでも、自分が変わり、自分の出来る事をして行きたいと思います。
- 何を変えるか？という問いは、とても自分を見つめる機会になりました。
- 答えの無いところ、又、今までよりも良い（参加型だから）
- 障害平等研修で日常生活で意識していなかった事や気づきをみつけられてとても良い学びになりました。
- どうしたら色々な人達が「普通」に暮らせるようになるかのか…常に考えて行きたいです。
- 障害者の生のお話を聞く事が聞く事が出来て勉強になった。自分自身の理解を今後に深めたいと思った。
- 障害について多くの面がある事が分かりました。多くの市民や子供達に、この様な場を与えた方が良い。

- 障害とは何か。ワークショップ形式で考えることができ、今後どの様にしていくかを考え直す研修となった
- 初めての研修でしたが、様々な仕掛けがあり有意義なものでした
- 障害者の気持ちを体験したり、考える機会がなかったので、新しく学ぶことが沢山ありました
- とても良かった、自分の友人・知人・勤務先の人達にも受けてもらいたいと思いました。
  街が変わる、という事に、とても希望がもてます
- 健常者・障害者・老若男女、様々な立場の人が、
  『障害とは何か』について一緒に一生懸命話す事ができた事が素晴らしかったです
- 市内に小中学校にも広めて欲しい。来年も開催して欲しい
- ２回目でしたが、色々な考えを知る事ができていつも勉強になります。
- 現状を伝える場があり良かった。障害・健常関係なく様々な意見交換ができる事が、心のバリアフリーなのか、と実感できた。
- この研修に参加することで、障害がなぜあるのかを考えることができて良かったです。
- 自分の中で抽象的であったものが、参加された皆さんの声で新たな気づきや発見があり、まだまだ不十分ではありますが、少し具体的な行動が見えたように思います。
- 今回が４０名ぐらいの参加でしたが、次回はぜひ学校関係者の方々に来て欲しい。
- 障害者の親として、支援者として、どっぷりと浸かってしまい、本質を見逃していたのかもしれない、と反省している。時々立ち止まりながら、振り返りながら、先をみつめて歩いていこうと思いました。
- 障害者権利条約を表示していて良かったです。
- より多くの方に参加していただきたいです。(特に健常者で活動している方たち)
- 初めての参加でしたが、知らない世界・無知を恥じています！！
- ぜひ、学校(小・中・高・特支)で研修を行ってください。
  児童・生徒・教員向けでお願いいたします。地域講演・各市役所の障害福祉課職員が知らないこともあります。１２月上旬は障害者週間です。それ以外でも良いので、研修講習をお願いします。
- 社会に課題の視点を持てる研修が少ないので、良い研修だと思います。福祉教育に取り入れたいです。
- 社会の中の障害者と共に生きる、障害者の方も参加した研修は良かった。
- これからもこの研修を定期的に開催して、日本中に理解が深まると素晴らしいことだと思います。
- 考える時間がとても大切なことだと思いました。もっと広まって欲しい。
- 毎回新たな気持ちで参加できることが、DET の良さでもあると思います。私たち親もこの DET を少しずつ広げていけるよう頑張っていきたいと思っています。今後共よろしくお願いします。
- ２回目でしたが障害について、もう一度考える機会をいただき良かったです。
- 私はいろいろな場で「誰がいても当たり前」の世の中にしよう！と話をしています。困っていることを解決する方法をいろいろ考えるのは楽しい作業なので１つずつ解決できたらいいなと思います。知らないことを知るのはとても楽しいです。今後もいろいろ教えてください。
- “障害に対する自分自身の持つ障害が取り払われたような、研修をやっていくうちに自然と心の壁が少しずつ低くなっていく不思議・感覚でとても大きな意義のある研修でした”
- この研修に参加することで、私自身考えたこともない、あるいは知らなかった事、私だけではなく友人知人と話題にしたこともない「障害とは」と言うテーマを身近に考える重要さを認識できて感謝でした。
- 考えるきっかけと、考え方や視点など学べました。日常で少しでも実践できたらと思います。

- 今回の研修が終わってから家に帰るまでに、どこに「障害」があるのか意識して帰ってみようと思いますまたその「障害」に対して自分ができる事は何か考えています。

以上